

### 3 大学連携天野地域活性化プロジェクト

## 平成 29 年度成果報告書



和歌山大学ミッションメンバー

辻合悠・中尾萌子・前野華凜・加藤史也・中尾萌子・木村青空・長谷川太陽・村木寛彩・坪井和広・南川瑞人・高津真美・稲葉修治・本間明・寺上和志・泉和歩・轟森守・麻生桃之進・藤田幹人

和歌山県立医科大学ミッションメンバー

西川太郎・串上遥香・曾我部槇子・松岡佑弥・松井啓悟

和歌山信愛女子短期大学メンバー

梶谷百音・雑賀由衣・則藤あずさ・坂上嘉那・尾崎明日夏・井下友絵

指導教員

村田和子（和歌山大学地域連携・生涯学習センター 副センター長 教授）

森下順子（和歌山信愛女子短期大学 保育科 准教授）

## 1. 目的・目標

### 1-1 課題内容（ミッションの目的と実施方法等）

自然豊かな、和歌山県かつらぎ町天野地区をフィールドとし、地域の現状分析を通して、地域の課題を明らかにするとともに、学部の隔たりなく、サークルの構成員を集め、多面的、多角的に地域の課題に対して取り組む。また、和歌山大学、信愛女子短期大学、和歌山県立医科大学で共同テーマを設け、大学コンソーシアムとしても活動する。7月から活動をはじめ、研究テーマに応じて部会を結成し、現地への視察を行い、分析をする。11月に現地でのFWをサークル全体で実施し、年間の活動内容をまとめる。また、2月にプロジェクトサークル主催で報告会を開く。

### 1-2 到達目標（年度内に期待できる具体的な成果等）

地域の現状分析を通して見えてきた課題を解決する手立てを考え、地域と連携、共同しながら、計画を立て実行する。学生と地域との交流の促進や地域との交流を通じて地域に対しての想いを育てると共に学生のコミュニケーション力や問題解決力・応用力・実践力等を養うこと。構成員が地域に対して愛情を持ち、地域社会のより一層の発展に貢献すること。報告会やSNSを通して天野地区の自然の豊かさを学生を含め多くの人々に知ってもらう。また、社会教育・生涯学習についてサークルの構成員が理解し、説明できる。

## 2. 天野地域についての基礎調査

### 2-1 天野地域について

天野地域は、かつらぎ町内の南に位置し、高野山のふもと標高 450m にある小盆地である。和歌山県の『風景百選』、『日本の里 100 選』にも選ばれている。『ふるさと生きもの里』にも認定され、初夏の夜空にはゲンジボタルの乱舞が見られる豊かな自然に恵まれた地域である。先にも述べたが、このホテルが天野との出会いだった。また、天野地域には世界文化遺産に登録された高野山町石道とともに、世界遺産である丹生都比売神社が鎮座し、約 1700 年もの間培った豊かな歴史・文化の里でもある。学生も神社を訪れるなかで、張り詰めたなかにある清らかさ、荘厳さを感じることができた。

現在、天野地域では過疎対策特別委員会や天野の里づくりの会による豊かな自然や歴史・文化を生かした里づくりの取り組みが進められ、地域の活性化を図っている。移住希望者も多く、毎年数件の移住者がある。後に詳しく述べるが、天野小学校は、廃校となってしまったがその校舎を回収し、地域交流センターとして簡易宿泊設備もある施設へと生まれ変わ

っている。そのセンターを中心とした地域づくり並びにお年寄りや子どもに対する支援、移住希望者や移住者に対する支援等をさらに進め、地域の活性化事業を行っている。

また、天野地域は、上天野、下天野、神田の3つの集落で構成されており、過疎集落等自立再生対策事業の実施計画書(H26年度)によれば、生活圏全体の世帯数は109世帯290人、65歳以上の高齢者は102人(35.2%)、15歳未満の年少者は21人(7.20%)となっている。生活圏の現状と課題を把握することも、地域に入る学生として知っておくべきことであると考える。

## 2-2 天野の里づくりの会について

「天野の里づくりの会」では、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産登録されている丹生都比売神社や町石道の保全やウォーキングマップづくり、そば栽培や農業体験の実施に取り組んでいる。

天野の里づくりの会の活動のきっかけにH8年からH14年にかけて行われた、天野地域のほ場整備事業、H16年の丹生都比売神社と高野山町石道に対する世界遺産登録が背景にあった。ほ場整備事業で大切にされた景観や世界遺産に登録された歴史や文化を生かし、天野の里全体で何か取組が必要になると考え、世界遺産と美しい自然を守り、農村風景や美味しい農産物を活用した交流活動や歴史・文化の伝承活動を通じ、魅力的で明るい将来展望のある「天野の里」をつくるため、H18年12月に『天野の里づくりの会』が誕生した。当初の会員は正規の会員22名、サポート会員7名の29名でスタートした。現会員数(H23年資料)は、地区正会員53名とサポート会員67名の計120名となっている。天野へ移住してきた正会員もあり、サポート会員には大阪市や和歌山市から取組の応援に来てくれる方もいるという。

会員数を見るに、現在は地区の人口の約半数が加入する団体になっている。自主加入の組織でありながらも、それだけの人数が加入していることは、谷口先生の地域住民と地域課題を結びつける力量が大きいのではないかと考える。また、会の活動が地域課題に寄り添った活動であることも加入者が増える理由の一つではないだろうか。

また、私は「天野の里づくりの会」の取組で得た5つの宝(豊)に注目した(資料①)。第2の宝に「むらづくりの楽しさを通じて住民意識が積極的な方向に大きく変革したこと。」とある。会の活動を通じて、会員の自己の成長や地域とのかかわり方への変化がみられる。こうした住民の成長、意識変化は、住民に地域を考える土台を形成し、後に述べる天野小学校の統廃合のプロセスにおける住民合意、意思決定のプロセスと廃校後の学校施設の利活用において発揮されたのではないかと考える。

### 2-3 天野小学校の廃校に至る経緯

創立 139 年の歴史ある天野小学校は H25 年 3 月末、統合され、廃校となった。統廃合の経緯を H24 年 12 月 17 日『かつらぎ町民の皆様へ』をもとに記述したい。そもそも、学校統廃合問題が提起されたのは、町と町教育委員会が H19 年に小学校の統廃合計画を進めるため、地域との懇談会を開催したところから始まるという。当初の小学校統廃合の理由は耐震対策においてすべての学校に耐震工事を施すのは至難であるということだった（天野小学校は耐震構造を満たしている）。しかし、廃校の理由は「地域のコミュニティ施設にする」「小規模校のデメリットについて」など、二転三転することになる。

そんな中、天野区民は地域において学校が存在する意義を何度も話し合う。結果として、単に学校教育の場として小学校があるのではなく、「地域の灯台として、文化の象徴として学校はある。天野にとって学校がなくなることは、地域の存続にかかわる大きな問題だ」と判断したのである。

天野の里づくりの会での移住者受け入れの取り組みもあり、過去 10 年（H24 年まで）で 20 世帯の移住者があった。結果、天野では 0 歳から 3 歳の乳幼児が 11 名いる（H24 年当時）。新規移住者の移住の理由は豊かな自然、豊かな村組織、豊かな環境での小学校の存在である。「中学校からはいやがうえにも競争社会の波にもまれる。せめて、小学校だけは、ゆったりと、情緒豊かに教育を受けさせたい」という、保護者の確固たる教育に対する信念と願いからのものがある。

全区民の署名を添えて学校存続の要望書を町委員会へ提出した。要望書の提出を通じて、学校存続の問題は、単に保護者の問題ではなく全区民の願いとしてあること強めた。その後、町教育委員会とは 5 回にわたり教育懇談会という形で話し合いの場を持つが、議論の内容に対して明確な答えを得ることはできなかったとある。

町教育委員会の誠意のない対応（要望書への未回答、虚偽の報告など）があったことにより、統廃合のための条例改正案が提出されることになる。「『協働のまちづくり』とは一体何なのか。住民合意とは一体何なのか。合意がなくても議会さえ通ってしまえば合意は成立するという考えは、本当の意味での議会制民主主義のあり方なのか。今一度考える必要がある。」と、紙面にて提起している。

私たちは天野小学校統廃合に至るプロセスから、天野地域の問題から、かつらぎ町の問題であることを確認し、自分の住む地域でも起こりうる問題であることを自覚しなければならない。民主主義を考えるうえで、多数決の原理だけが民主主義ではなく、合意形成を図っていくことも民主主義であることを私たちは考え直し、捉えなおす必要があるといえる。

廃校間際、学校とのお別れ会を開き、東京や大阪など各地から天野小学校の卒業生が 200 人体育館に集まった。そこで、昭和 35 年に天野小学校を卒業した谷口さん（天野の里づくりの会会長・元天野小学校教頭）は天野小学校について「大げさかもしれないが、（天野小学校は）心の糧というか、地域にとっては灯台のような存在だった。」（NHK 和歌山 あす

の WA! (H25 年放送より) と述べている。天野小学校が単なる学校教育施設としての機能だけではなく、地域の灯台として、地域活性化や文化創造の中心として大きな役割を担っていたことがうかがえた。

#### 2-4 その後の地域交流センターとしての展開

小学校統廃合後、「天野小学校は移行に伴う利活用アンケート」を行い、アンケート結果をまとめ、自治区が一丸となり、町と交渉した。結果、リノベーション工事を施し、現在の天野地域交流センター(ゆずり葉)となる。設置に関しては、「都市住民等が、農業実習及び農山村生活体験等を通じ、地域住民との交流を促進し、定住及び担い手の育成・確保など、賑わいと活力ある豊かなまちづくりの実現のため、天野地域交流センターを設置する。」(天野地域交流センター 設置及び管理に関する条例 第1条)とある。自分自身、ゆずり葉の利用や宿泊を重ねる中で、とても充実した施設であることを感じた。しかし、今後どのような取り組みを進めていくのかも大きな課題であると思う。当プロジェクトにおける地域活性化部会では利活用についての可能性を考えることができた。施設が単なる貸し館にならないために、施設において事業を展開する必要性も感じられる。子育て支援室や調理室、談話室を有するゆずり葉は、天野地区の公民館としての役割も果たしている。他地域の公民館と比較するならば、文庫活動(図書室)や、講座を開催することもできるであろう。様々なことを創造できる施設であることは間違いないであろう。

公民館とはどんなところであるか。大阪府貝塚市公民館案内には「自由なたまり場」「集団活動の拠点」「文化創造・まちづくりの場」「生涯の学びの場」であるとされている。また、案内には公民館の4つの特質として「地域性」「施設性」「専門性」「公共性」があると述べられている。他地域の公共施設の取り組みを参考にしながら、地域の拠点としての役割を今後創造していかなければならない。

### 3. 各部会の活動内容について

#### 各部会レポートに記載

(農業・歴史観光・地域活性・地域医療・子育て・環境保全)

#### 4. 今後の課題・展望

##### 4-1 今後の課題として残された問題点

今年度の活動を通じて、部会として学生が地域に入る中で、目的がわからず地域に入っていた学生が少なくなかった。部会ごとの会議、全体での会議が足らず、なんのために地域に

行っているのかわからないといった声があった。また、活動を通して学生自身が「問い」や「課題」を持ち、自己の成長を促したという点では、成果は多く見られたといえるが、地域に成果はあったといえるのだろうか。地域は学生の若い感性から出るアイデアや活動に期待しているのではないだろうか。しかし、私たちはどこまで主体的に地域とかわかることができたのだろうか。

今年度は、全体で地域を知る活動の時間が少なかったといえる。先行研究といえる「地域まるごと実習」では地域を学び、知る活動がとても重視されていた。当時の教育学部長、川本治雄氏は実習の冊子の中で、『「地域を知り、地域から発信すること」は学生の学びの循環を作る。学習するということは、「知識をストックすること、知識をつなぐこと、知識を再構成すること、再構成の中で意味や価値を見つけること」である。すなわち「学ぶこと」はこれらの循環を作ることである。』と述べている。当プロジェクトでは、学生が知識をストックする時間、つなぐための働きかけ、再構成する時間が足りなかったのかもしれない。今後は、学ぶことの循環を大切に組み組んでいきたい。また、地域の価値を人やモノ、地域資源から見出していくことができればと思う。

また、組織化に、運営方法に関しても見直す必要がある。先行研究といえる『地域まるごと実習』では地域を学び、知る活動がとても重視されていた。学生が地域の様々な分野（福祉・教育・農業・移住・子育てなど）を知る中で自分たちが発信したい地域課題を見つけ探究していたことを見ると、地域に出る前に部会を編成したことは評価が分かれると考える。今後は、私たちのサークルとして、社会教育・生涯学習サークル「わかまなび」の会則を取り決め、方針を定めたり、自分の口でサークルの取り組みを説明できるようになっていく必要もでてくるのではないだろうか。

## 4.2 今後の活動の展望

今後の活動に関しては、次の世代が作り上げてほしいと考えている。現に、後輩と来年度の構想を話す中で、後輩の考えはなんて創造的で面白いのだろうと感じている。私たち3年生・4年生を含め今年度で活動に対して積極的に関わりづらくなる環境がある学生は後輩を見守り、サポートする形をとりたい。決して離れるのではない、後輩の活動を見守り、いつでも助ける準備をしておくのである。今後の活動において、社会教育・生涯学習のエッセンスは、学生が地域と関わり、自己と向き合う中でとても大切になってくると考える。それゆえ、地域における社会教育・生涯学習とはなにかをサークルのメンバーには考えていってもらいたい。天野地域も学生も、学び得たことを活かそうとしている。これからも継続して経験する中で、学びの循環を絶やさず、地域の活性化を考えていきたい。

# 環境保全部会 報告

## 【メンバー】

高津真美 和歌山大学システム工学部 3 回生 (部会長)  
長谷川大陽 和歌山大学システム工学部 3 回生 (副部会長)  
仲祥宏 和歌山大学システム工学部 3 回生  
轟森守 和歌山大学システム工学部 2 回生

## 【地域キーパーソン】

中瀬孝大さん・宮本忍さん・杉本隆彦さん

## 1. ねらい

大自然の天野で五感を働かせながら、地域の良さをまず知りたかった。普段観ることが出来ない虫を観察し、街灯があまりない天野地域で、星の観察をしてみたかった。

## 2. 状況・成果

私たち、環境保全部会は、10月2日に天野に行き、11月のフィールドワークについて、地域の人たちと話し合いました。そして天野の自然環境についてもっと触れ合うため、「きのこ狩り」と、「天野の産業廃棄物の問題」についての聞き取り調査を、次回の天野での活動に盛り込むことにしました。ですが、あいにく天候や、メンバーの都合により、なかなか天野で活動することが出来ませんでした。そこで私たちは、天野の産業廃棄物について調べたことを手書きの記事にし、ブックラックに入れて天野に寄贈することにしました。



《地域の方と今後活動に対する協議の風景》



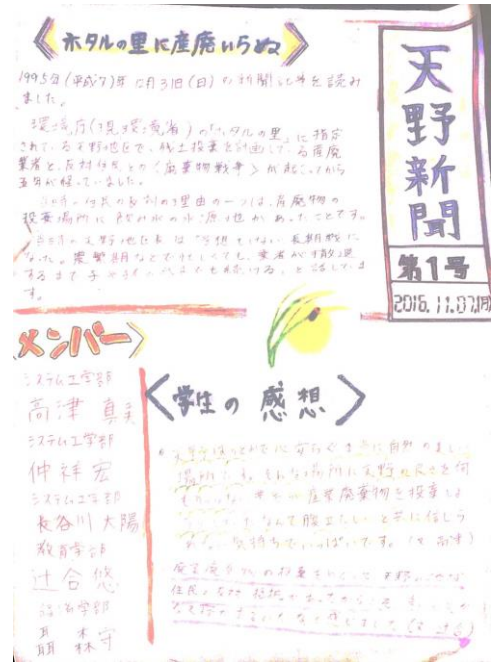
《火入れ式前日・制作現場を見学》

11月5日にブックラックの設置場所の下見をしに、天野のゆずり葉に赴きました。その時に、本格的な望遠鏡がゆずり葉にあるとのことで、地域の方々の協力の下、望遠鏡を組み立てました。フィールドワークの時に、これを使い、天体観測を行うことにしました。また、その日にちょうど火入れ式（日本刀製作における伝統行事で、炉で炭火を起こして作刀を行うこと）の準備があり、お手伝いに行きました。製造現場に立ち会うことが出来、刀を作製するのに使われる道具や大きな炉を見せていただきました。そして職人さんに、



刀職についての伝統や、やりがい、大変さについてお話を伺いました。最後にお手伝いのお礼にと、自作のペーパーナイフをいただきました。

11月13日、フィールドワークの2日目に、私たちは、ワークショップで作った新聞記事を発表しました。その後、フィールドワークの参加者全員にも、班に分かれて、天野の地域の方々に、天野地域の環境について色々なお話を伺い、手書きの記事を作成してもらいました。それらをブックラックに入れて寄贈しました。地域の方々や、周囲の協力のおかげで無事ワークショップを終えることが出来ました。望遠鏡は残念ながら壊れており、使うことはできませんでしたが、深夜頃、天野地域を散策し、肉眼ではありますが、星を見てとても綺麗だったのを覚えています。



《11月合同FWで作成した新聞記事》

### 3. 課題

- 環境保全というテーマは、範囲が広すぎ、目的を絞って活動することが出来なかった。
- キノコ狩りを通じて、地域を知る取り組みが出来なかったこと。
- 星の観察を行いたかった。
- 蛍の観察を通じて、地域の良さをさらに感じたい。
- 天野地域の産業廃棄物の問題について、地域のキーパーソンの方々にお話を伺う。
- 部会で予定を合わせ、事前学習を踏まえたうえでの観察（例：ほかのホテルの里とどう違うか。産業廃棄物に対しての事前学習を行うなど。）
- 天野地域の良さを知った後、どのように次の活動に生かしていくか。



# 子育て支援部会 報告

【メンバー】 和歌山信愛女子短期大学 保育科2回生

梶谷百音 (部会長)

井下友絵

尾崎明日夏

雑賀由衣

坂上嘉那

則藤あずさ

【地域キーパーソン】 篠原登子さん・妹尾由美子さん・民谷雅代さん

## 1. ねらい

天野地域で暮らす子どもたちやその保護者とまず関わりたかった。天野地区の子育て実態・環境を理解した上で、私たち学生にできることは何かを考える。また、天野地域に子育て部会として関わり、どういったことが地域貢献に繋がるのかをこのプロジェクトを通して発見する。

## 2. 状況・成果

私たち子育て部会は、9月24日に森の幼稚園に参加しました。その日は天候が悪かった為ゆずり葉の中にある子ども支援室に伺い、子どもたちに紙芝居や絵本を読んだり、遊んだりしました。その時に、天野地域で子育てをする母親に話を聞くことができました。

10月15日に地域貢献のひとつとして、天野で子育てをする母親に天野地区で子育てする上で困っていることや課題をアンケート調査しに行きました。母親にアンケートを書いてもらいながら色々お話を聞いている中で、いくつか課題を見つけることができました。特に多くあった意見としては、救急病院が遠い、天野地区に学童があれば助かる、ファミリ

ーサポート制度でした。そこで私たちは、そのアンケートもとにどうすればもっと天野地区で子育てしやすい環境になるか、私たちに何かできることはないか考え、まとめました。

11月の報告会では、今の子育て状況を知ってもらう為、まとめたものを発表しました。また、フィールドワークでは地域の親子や学生全員で、電車ごっこや鬼ごっこをして楽しみました。エプロンシアターにも関心をもって見てくれていたので、嬉しかったです。地域の方々や、周囲の協力のおかげで無事ワークショップを終わらせることができました。

#### 【11月のフィールドワークでの様子】



### 3. 課題

- ・アンケートを取るだけになってしまったこと。
- ・森の幼稚園に一回しか参加できなかったこと。
- ・ゆずり葉にある子育て支援室の活用方法について考える。
- ・アンケートをもっと多くの方にやってもらいたい。
- ・来年の学生に繋がられるようにしたい。
- ・天野地域の子育て環境を知った後、どのように次の活動にいかしていくか。

## 地域医療部会 報告書

### 【メンバー】

西川 太朗 和歌山県立医科大学医学部医学科 1 回生 (部会長)  
串上 遥香 和歌山県立医科大学医学部医学科 1 回生  
曾我部 槇子 和歌山県立医科大学医学部医学科 1 回生  
松井 啓悟 和歌山県立医科大学医学部医学科 1 回生  
松岡 佑弥 和歌山県立医科大学医学部医学科 1 回生

### 【地域キーパーソン】

土屋河内清美さん  
岡浦詞美さん  
松下京子さん

## 1. ねらい

地域の方々との相互コミュニケーションを通じて、天野地区の地域医療の現状とその特性、及び課題点などを把握することを主な目的とする。またその中で、地域医療とはその地域固有のものであるという視点を持ちながら、私たちにもできることを模索し、実践する。

地域医療部会としての目的を達成することにとどまらず、他の5つの部会の活動にも参加し、様々なイベントを通じて天野地区を体感する。

## 2. 状況・成果

地域キーパーソンの方々のお話によると、天野地区は住みやすい環境下にあるが、地域中核病院が遠いということが一番の不便な点であるということであった。そういった現状のもと、天野地区では様々な取り組みがなされていることが分かった。その中でも特に興味深かった2つの取り組み、①天野診療所 ②置き薬（配置販売業）についてここで挙げる。

### ① 天野診療所

隔週で様々な診療科の先生が交代制で天野診療所まで来て診療所を開く。場所は、ゆずり葉の近くで利用しやすい場所にあるといえるが、馴染みの先生がいつ来るのかわからない、緊急時に空いているとは限らないといった不便な点も残されている。利用者もあまり見かけなくなってきたとの声もあった。



天野診療所の外観

## ② 置き薬（配置販売業）

3か月に一度、薬の販売業者が自宅まで来て「置き薬」と呼ばれる様々な種類の薬の入った箱の中身を使った分だけ補充する仕組み。基本的に使った分の代金は後払いで、常にある程度の薬が家に保管されている状態が保てるため、安心感がある。しかし、その代金は人件費なども含まれるため割高となっている。

このような取り組みがなされているのを知り、私たちは天野地区における課題点の多くについては、既に策がめぐらされているような印象を受けた。

こういった現状を踏まえ、私たちにできることとして「緊急時に落ち着いて対応できるようなマニュアル」といったものを考え、作成した。これは、緊急時に救急車を呼ぶ際に、「何をすべきか、また何を伝えるべきか」ということを事前に紙にまとめておき、電話の近くに貼っておくのはどうだろうかという考えである。地域医療部会としては、このマニュアルのフォーマットを作成し、世帯数分コピーして配布するといったことが主な活動となった。

The image shows a hand-drawn emergency manual form. At the top left, the number '119' is written in large black characters inside a red jagged starburst. To the right is a drawing of a red and white ambulance with a cross on its side. Below the ambulance is a drawing of a green mobile phone with a speech bubble containing the number '119'. The form is divided into two main sections, each enclosed in a yellow rectangular border. The first section is titled '落ち着いて答えましょう' (Stay calm and answer) and contains the following fields: '住所 ( )', '名前 ( )', '年齢 ( 歳 )', '性別 ( )', '持病 ( )', 'かかりつけの病院 ( )', and '主治医 ( 先生 )'. The second section is titled '近所に助けを求めましょう' (Ask for help nearby) and contains three lines for contact information: '( ) さん TEL - -', '( ) さん TEL - -', and '( ) さん TEL - -'.

緊急時マニュアル

## 3. 課題

- 事前にアンケートなどを実施して、地域医療についての調査（不便な点や、援助が欲しい取り組みなど）を行ってみてもよかったかもしれない。
- 実際にほかの地域でどのような地域医療が行われているのかと比較して、天野の特性を活かした地域医療を考えることができればなお良かった。
- 今回作成したマニュアルがこれからどう使われていくかを知る（項目の過不足はないか、電話の前に貼っておくことで安心感があるか、等）。

# 地域活性部会 部会レポート

## ～地域のために地域を知る～

### 《メンバー》

- ▶南川瑞人 和歌山大学教育学部 3 回生（部会長）
- ▶寺上和志 和歌山大学教育学部 3 回生
- ▶本間明 和歌山大学観光学部 3 回生
- ▶坪井和広 和歌山大学システム工学部 3 回生
- ▶加藤史也 和歌山大学システム工学部 2 回生
- ▶木村青空 和歌山大学経済学部 1 回生

### 《地域キーパーソン》

- ▶谷口千明さん
- ▶庵野清高さん
- ▶坪井哲夫さん

## 1. 今期の目標

地域活性と一言で言っても広いものがある。そこで、「ゆずり葉」の活用を考えていこうというのが地域活性部会テーマ・目標となった。しかし、「ゆずり葉」のこのみを考えるだけでは本当に地域のことを考えていないというお話があり、今期は「ゆずり葉」のことも考えるが、まず天野という地域を知ることから始めようと決まり、今期は活動してきた。

## 2. 今期の活動

今期は、上記したように地域を知ることからのスタートとなった。そこで、キーパーソンの一人で移住者でもある坪

井さんにインタビューという形でお話を伺うこととなった。インタビューでは、坪井さんが移住するきっかけやその後の生活などもとから地域にいない移住者の生の声を聞くことができた。

インタビューの後に、谷口さんの案内のもと、地域を実際に見てまわった。学生だけでは見ることが難しいであろう場所や、そういった場所の背景など様々詳しいお話を伺うことができた。

また、フィールドワークで行ったグループワークでは各部会でゆずり葉の活用法について考えていただいた。各部会で今期活動し





てもらった内容をもとにどのようにゆずり葉が使えるのか部会によって三者三様になってこれからの活動においてとても参考になる意見をもらうことができた。

### 【各部会で出たゆずり葉の活用法】



#### <農業部会のゆずり葉活用法>

・天野の食材を利用した料理



・小学生の農業体験の宿泊



農業部会では、数日かける農業体験でゆずり葉に泊まってもらうことができるのではないかと結論に至った。また、天野の食材を簡単に求められるネットワークを作成する必要があるという意見も出た。



### 3. 課題と心境の変化

今期は地域に関わる時間がとても短く、実際に活動するということまでいくことができなかつた。しかし、部会のメンバーもはじめと心境は変化し地域のためには何ができるのか、これから自分たちがどのようにかかわっていくのかを考えるようになった。

来年度は、上記しているような各部会ででた意見をもとに各部会と協力しつつ、ゆずり葉をいかに活用していくのか実際に活動していきたいと思う。

#### 【メンバーの気持ちの変化】

最初は和歌山の過疎地域の現状を知りたいと思い、サークルに入りました。実際に天野に行ってみると、天野の住民の人柄や自然の美しさに惹かれました。だから今後は、サークル活動を通して天野の力になりたいと思っています。(木村青空)



始めはサークル長の辻合からいろんな大学の人が入ると聞いていたので、みんなと遊べたらいいなぐらいの軽い気持ちだったが、いざ地域の人や天野という土地と関わっていくたびにどうすればゆずり葉に人が集まるのかとか、天野のセールスポイントはほかにないだろうかなど考えるようになって初めよりいろいろ真剣考えることが増えた。(坪井和広)

天野の魅力って何だろう？

天野の人々の熱意がすごい。

天野にはどんな人が住んでいるのだろうか？

➡ ほたるを何としてでも見たい。

天野の産業は何だろう？

消費活動の場(地域にお金落ちてなおかつ循環する装置)が少ない。作りたい！！

(本間明)

はじめは、参加に関して、どのような活動がうまくいくだろうか。また、どんなことをすれば地域と自身たちにとって有意義な活動ができるだろうか立案するのが非常に困難だった。しかし、部員全員でイメージなどからこんなことをすれば、また、できれば面白いのではないかと案を出し合い、抽象から具体的に落とし込むことが出来た。やはり、一人の意見だけでなく、それぞれの意見を出し合うことで事象の洗練さはより増していくのだと改めて認識させられた。次に活動を通じて、天野に対して地元のような愛着が芽生えるようになった。谷口先生をはじめ、地域の方々や子供たちと触れ合うことによって、天野の良さや詳細を知ることが出来、また来たいと思えるようになった。このように座学でその土地の情報を知るだけでなく、実際に現地に足を運んで学び、交流することでとても有意義な時間となるというのが改めて認識された。(一部省略、寺上和志)

はじめはゼミでのフィールドワークで行った天野という地域で活動できると聞いて、フィールドワークで足りなかった、知りたいと思った内容まで深く学習できるかなと思い参加させていただいた。実際に参加してみるとフィールドワークでは知ることのできなかった本当の地域の声を聴くことができ、地域を知るといふのはこのようなことなのかと思った。地域の声を聴くことで自分の中に参加前の気持ちよりも地域の方とともにという気持ちが大きくなっていった。来年度もできる限りかかわっていければと考えている。(南川瑞人)

## 「土と人から学ぶ」

### 【メンバー】

中尾萌子	和歌山大学教育学部 3 回生
麻生桃之進	和歌山大学システム工学部 2 回生
村木寛彩	和歌山大学経済学部 1 回生
稲葉修武	和歌山大学観光学部 4 回生
辻合悠	和歌山大学教育学部 3 回生

### 【地域キーパーソン】

山本弘幸さん
上平仁さん
津田幸弘さん

### 1. ねらい

天野で農業を体験させていただくことで、天野地域や農業について知りたいと考えました。また、天野地域で口承される天野での農業についての情報を、文字に起こしてまとめたいと考えていました。

### 2. 状況・成果

生業としての農業を学ぶために、カブ・大根の生産・販売を計画しました。生産活動に関しては種まきから収穫まで、地域の方のご指導・ご支援のもと携わることが出来ました。実際に小さな種が、立派な大根・カブに成長する姿に、感動の声が上がりました。販売に関しては、残念ながら行うことが出来ませんでした。

地域の方と農作業を行うなかで、様々なお話も聞かせていただきました。例えば、種まきをした後は周りの土を被せるのではなく、覆土用の別の土を被せた方が、色が違うので分かりやすいということや、大根は生長の途中で小石などに当たると簡単に二股に割れてしまうので売り物にならなくなるなど、農業を行う上での知識をお聞きしました。また、天野の土に関わって、「丹生（にゅう）」という言葉の由来についてもお聞きしました。天野にある丹生都比売神社の「丹生」という言葉には、「丹砂（水銀を含んだ赤い砂）の産地」という意味があるそうです。昔は金箔を貼る際に水銀を必要としていたそうで、天野のような土地は非常に重宝されていたとのこと。土から、天野の歴史について知ることができ、地域の方がよく地域を知られていることを感じました。



<作業の様子>

また、天野地域に移住されてきて農業をされている住民の方に、インタビューをさせていただきました。インタビューでは、移住の経緯・天野でのお仕事・移住してからの村や、ご本人の変化・これからの天野について考えられていることなど、丁寧にお話をさせていただきました。詳しいインタビューの内容はまたまとめているものがあるため、そちらを見ていただければと思っています。農業とい

う職業の難しさと価値、移住というときに単なる住居の移動ということ以上に、地域の方との関係などがあること、天野の方が深く地域に対して考えを持っておられることなどを聞いて、初めて知ることばかりで驚き、また天野の素敵さを感じました。

11月12、13日に行ったFWでは、1日目に部会のワークショップとして、今年度の活動の振り返りと、今まで農業部会が育ててきたカブ・大根の収穫をサークル全体として行いました。畑に入り、自らの手で土の中から作物を引き抜く学生の目の輝き、水で洗ったばかりのカブにその場で齧り付く学生の素直な感動がありました。短い時間ではありましたが、このように関わらせていただくことがなければなかなか出来なかった経験を、サークルとして共有でき、FW後も話を聞いていて学生の心に残った活動になったかと思います。



<インタビューの様子>



<活動の振り返り>



<収穫の様子>

### 3. 課題

部会としてのねらいは最初に立ったのですが、スタートアップ会後の地域の方との話し合いが不十分であったため、全体の計画が不明確なまま活動を進めてしまいました。活動をする中で、当初のおおまかな計画とは活動を変更することも多々あり、メンバー全員が活動全体のイメージをもって取り組む環境づくりが出来ませんでした。

また、部会メンバーが揃って地域に活動に行くことがあまり出来ませんでした。そもそもの部会のメンバーが5名と少人数であったこと、農業には天候の影響も大きく日程の調整が難航したことなどにより、毎回数名ずつの参加となりました。そのフォローとして、他部会のメンバーも活動に参加してくれたりしましたが、部会全体としてしっかり農業に関らせていただくことが、出来なかったかと思っています。また、短い期間でなんとか活動は4回行えたのですが、活動日以外に部会として集まって、それを共有する時間が無かったことは、もったいなかったです。

農業を学ぶためにと、大根・カブの生産活動の一部に入らせていただいたのですが、それを販売する、という意義を確認し実際に行うことが出来なかったことは、反省が残ります。

## 歴史観光部会 報告

### [メンバー]

前野 華凜 和歌山大学教育学部 3 回生 (部会長)  
辻 合 悠 和歌山大学教育学部 3 回生  
泉 和 歩 和歌山大学教育学部 1 回生  
藤田 幹人 和歌山大学経済学部 1 回生  
松永 宏介 和歌山大学教育学部 3 回生

### [地域キーパーソン]

佐藤 恵さん  
丹生 晃市さん  
土屋垣内 仁巳さん

### 1. ねらい

天野の良さを見つけたり、体験したりして、観光についての現状を知る。

### 2. 状況・成果

「“天野”ってどういう地域なのか」部会のメンバーのほぼ全員が知らない状態だった。そこで、まずは天野に訪れ、どのような地域なのか、観光名所となる場所や建造物、自然など、天野のいいところ探しをすることにした。また、観光面の現状を地域のキーパーソンの方たちに話を伺って把握していくことも行った。

10月10日に天野に訪れ、キーパーソンの方たちに案内していただいた。午前には世界文化遺産である丹生都比売神社に行った。宮司である丹生さんのご厚意により、観光客の方たちと丹生都比売神社についての話を聞いたり、本殿などを拝観したりして、歴史の深さを感じることができた。午後には天野を歩いて散策し、天野の自然を身近に感じることができた。また、話をしている中で観光面に関しての現状も知ることができた。その中でも印象に残ったことは、リピーターが少ないということだった。実際に、天野にはハナモモやホテルのツアーが開催されており、観光客は訪れているが、何度も訪れる観光客はあまりいないようだ。



写真1 丹生都比売神社の輪橋



これらのことをふまえた上で、リピーターや観光客を増やしていくための具体的な方法を後日話し合った。話し合った結果、①四季それぞれのツアーを企画する②外国の観光客の方にお金を落としてもらう方法を考える③AR・VRを活用して、天野の歴史に身近に触れることができるようにする④宣伝する手段を増やし、世間に対して認知度を高めるようにする、というような意見が出た。また、他部会のメンバーの意見も参考にしたいという案が出た。よって、11月のWSの活動は「観光客を増やすためにはどうすればいいか」という議題にして取り組むことにした。

11月のWSでは、今までの活動内容を発表した後に、議題について班ごとに考えていただき、ポストイット形式で意見を付箋に書き、画用紙に貼ってもらうようにした。たくさんの意見を出していただき、自分たちでは気づくことができなかったことにも気づくことができた。また、早朝に丹生都比売神社に行ったところ、朝の太陽の木漏れ日が神社に当たり、幻想的な雰囲気を見ることができ感動した。天野の新たな素敵な一面を発見することができ、貴重な体験となった。

後日、WSで出していただいた意見をまとめていると、農業体験やホテルのツアー、ゆずり葉での民泊など、他部会と関連した内容のものがあつた。よって、今後の活動としては、他部会と連携して取り組んでいくこともいいのではないかと考えている。

2016年度は、天野のことについて少しずつ知ることができた年になったと思う。来年度は、学んだことを生かした活動を行っていきたい。

### 3. 課題

課題については以下のようなことがあがった。

- ・ハナモモ、ホテルのツアーなど既に実施されているものに対して、新たな要素を付け加える。
- ・朝のツアー、農業体験のツアー企画
- ・ツアーの増加
- ・伝達媒体を考える（SNSの利用など）
- ・天野をPRするチラシの作成
- ・リピーターを増やす方法を考える。

<例>

天野を訪れた人が周りの人に天野を紹介する。そして、次に天野を訪れた際に、互いに特典をもらうことができるようにする。

現在の社会教育・生涯学習サークル「わかまなび」 組織図

(2016年3月現在)

